



未だ師と仰ぐべき人物を見出し得ませんでした寅次郎に取って、  
この人こそ、生涯寅次郎の高師と敬うべき方と心に固く決め申しました。(…)  
僕、はじめてここに師の師たる人を見、欣快の至りと思っております。  
僕、大和における八十日間の収穫、これをもって、  
僕、生涯の最良と深く感謝いたしております。



上記は1853(嘉永5)年、吉田松陰が郷里の兄家に宛てた手紙である。この後「重ねて徳憑任ります。右、肝に銘し、感激おくあたはざるもの有之よつてかくもおすゝめ仕る次第であります」と三山の教えを乞うよう強く勧める文言が続く。松陰は「三山先生」と出会った喜びと興奮を、率直な筆致で綴っている。

幕末最高の思想家と賞される松陰を、かくも熱狂させた「三山先生」と谷三山。しかし、その人となりも著作も、多く伝わってはいない。

…1802(享和二年)大和八木の商家に生まれ、独りで諸学を修めたるう旨の儒者・経世家、その篤学から高取藩の士籍に列せられ仁政と教育の必要性を建言、自らも家塾「興讓館」で多くの門弟を育成、黒船来航のとき『靖海芻言』等を著し、幕府の開国策に警鐘を鳴らした…

このような乏しい情報をつなぎ合わせただけのプロフィールでは、松陰に映った「日本一の大学者と存じ奉ります」という三山の実像は、うかがい知ることできない。

一般に谷三山は「攘夷論者」にくくられるが、その思想は人民の生活安定と弱者救済で貫かれ、根本的に、当時多くの志士たちの攘夷論とは違っていたらしい。松陰が開いた松下村塾の「士規七則」は三山の家塾「興讓館塾約」がベースになり、また門下の久坂玄瑞や高杉晋作、さらには伊藤俊介(博文)にも三山への紹介状を書き、大和に向かわせたという。あるいは、三山に傾倒した松陰の思想は、国学や後期水戸学以上に、三山の「民生最優先」の考え方の影響が大きいかもしれない。

三山との出会いから六年後、松陰は江戸伝馬町の獄庭で刑死する。辞世に詠んだ「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」の大和魂には、谷三山のほか森田節斎、堤孝亭、森鉄之助、中村徳兵衛らと語らい「わが生涯の中、大和における八十日間は最良の時であった」という、大和(奈良)という土地への追慕も込められていたのではないか。

近世の「奈良」には、今日の日本とアジア・世界につながる、豊饒な思想空間が広がっていたのである。

(編集部責任者)

## 谷三山—吉田松陰の「師」

— 近世の奈良に生きた「日本一の大学者」 —

●主な引用参考文献：卜部和義「谷三山と吉田松陰の出逢い」(1974)八千代書房

●写真：(右)谷三山先生木像(谷家所蔵)  
(左)吉田松陰木像(京都大学附属図書館所蔵)